

編集後記

このところ、寄ると触ると新型コロナウイルス感染症（COVID-19）である。専門家と称する人たちが百家争鳴で賑やかだが、対策は暗中模索が続く。世界中の人びとが真夜中の暗い海を海図もなくさすらう。しかし、実は解決策を見つける方法は、実は単純なのではないか。

まず疫学調査だが、COVID-19の有病率や罹患率を経時的に追跡する。COVID-19関連の死亡率を患者の年齢で調整して、世界各国と比較する。感冒症状の患者のうち、COVID-19がどの程度いるのかを経時的に追跡調査する。これらの方法は、新興感染症では感染スピードが速い場合、データの解析ができた時点と現状に解離が見られる可能性がある。しかし、データの収集・解析は数日で可能であり、感染症の蔓延期には、数日程度のタイムラグは大きな問題ではない。

臨床検査医学的には、PCR検査、抗原検査、抗体検査といった診断ツールの検査精度を明らかにするのも重要だ。これは各所で行われているが、なぜか専門家たちの意見がまとまらない。後世の検証に供するため、保存血清などの検体を有症者・無症者とも保管しておくのも必要だろう。いつまでCOVID-19患者が感染性を持つのかを明らかにするのは、臨床病理学の出番だ。PCR検査で用いる咽頭ぬぐい液から得られた細胞で、SARS-CoV-2ウイルスの蛍光標識抗体を作成し、無症状者のSARS-CoV-2ウイルスのviabilityを見る。重症者が急変して死亡するケースが多いことについては、剖検からCOVID-19患者の死に至る病態を明らかにする。ただ、これは剖検を担当する者たちにSARS-CoV-2ウイルスが感染するリスクがあり、実施されるケースは多くはない。

ここに挙げたのは、30年も前に医学教育を受けた臨床医が思いつく程度のことである。しかし、どれ一つとして十分に行われていない。三密を避け、良く換気し、手洗いとマスク着用を励行するといった流行対策は、呼吸器感染症対策の基礎であり、今さら、エビデンスも何もないだろう。実施できればするに越したことはない。そして、人間社会の現実の営みを考えてみれば、それが大きな成果を産むことは難しいことも、当初から予想されたことのはずだ。感染症は人間社会の弱点を突く。社会的に最も弱い立場の人たちが犠牲になり、そこから社会全体に影響が及ぶ。この新興感染症は社会の歪みを反映し、ウィズコロナ時代の社会のあるべき姿を再考せよと、我々に大きな課題を突き付ける。しかし、人間は過去に学ばず過ちを繰り返すのだろう。

(齊尾武郎)